

先生や友達が沢山の「挑める機会」をくれるから、

恐れずに取り組んでいくのが一番大事

語り手 阿部瑞希（高校十四期生 文学部） 聞き手 前出彩寧

*

立守とわたし

―聞き書きに参加してくださいありがとうございます。

いえ、こちらこそありがとうございます。

―私は、高校二年生のGLの文系コースでバトントワリング部に入っている前出彩寧って言います。よろしくお願いします。

私は立命館大学の文学部人文科学国際文化学域文化芸術専攻ってちよつと長い名前のところの所属しています。今四回生の阿部瑞希です。よろしくお願いします。

―まず中入生っていうのを聞いて私も同じ中入生で勝手に親近感持ってたんですけど、中学も高校もなんで立守に入ろうと思ったんですか？

立守の雰囲気がまず好きで、文化祭とかみんなで一致団結したりとか、あと、国際交流とかで留学生の人とか来たりとかもするし、色んな挑戦に対して、先生が全力で応援してくれる感じがすごくあってそれがすごく好きなポイントで。実際、中学校の時とかも部活は美術部だったんですが、先生がこういうことやったらっていう風に色んなことに挑戦できる雰囲気を作っていたりとか、当時の中学校の先生とか高校の先生とかも一緒にやろうみたいな感じだったり先生たちが新しいプロジェクト立てたりとかして、色んなことに挑戦できるから楽しいかなと思って。それで高校もやっぱり立守かなって感じで。チャレンジがしやすい場所

すし先生たちと生徒とフレンドリーで個性的。今回の聞き書きで由谷先生と田辺先生の連名でメール来た時にも私の友達と「懐かしい！」って話してて。嬉しかったです。

―そうなんですか。当時の由谷先生とか田辺先生ってどういう先生でしたか？

雰囲気は変わらない気がします。たまに田辺先生は衣笠に通ってるから会ったりとかします。ストイックでズバツと言ってくたさるところが、いいじゃないですか。ちゃんと見てくれてはるなっていう感じ。探究でやってたこととかをずっと覚えてくださって。AP時は、みんなもうすごい必死でやってたからその分大学でレポート書くのすごく楽かもしれない。そこ（AP）で経験してたからレポートとかパワポとかでプレゼンしなきゃいけない時も周りの人とかと比べて早く終わったりとかクオリティーあげる余裕ができるから、あの時やってよかったって。いいこと教えてもらってたなって思ってます。

―先生繋がりで一番お世話になった先生はとこいますか？

うーん。いっぱいお世話になった先生がいらっしやるけど、特にお世話になった先生は菊池先生です。美術部で中学校一年生の時の入部から高校卒業までずっとお世話になって、色んなことに関して応援してくれたりとか、いいところを褒めてくれたりとかする感じのところがすごく嬉しかったです。すごく好きだったからお世話になった先生って印象。

あと、由谷先生にもすごくお世話になったし有賀先生は、高三の時の担任の先生でお世話になりました。今は北海道で記者をしていらっしやる岩井先生は、現代文の授業を通して、改めて文学の楽しさを教えてください。くださった素敵な先生です。今でもたまにお会いしています。

大飼先生や吉本先生には中学校の時に教えていただいていた、その時にイングリッシュランチという取り組みをやってはって、楽しそうやなと思って参加してました。

英語話すの楽しいなって思えたきっかけが、吉本先生とかが企画したイベントでした。今いるのも文学部国際文化学域、文化芸術専攻というどちらかというと色んな世界の文化とか芸術が混ざり合っていく歴史とかを分析するようなところだから興味を持ったきっかけは、そういった経験があったからこそだと思います。高校に入ってから国際交流委員とかでお世話になったりとかもしてました。すごく優しい先生で、親身になって話を聞いてくださるんです。留学行きますよっていうお知らせかな。去年の文化祭ぐらいの時にそれを言ったらすごい喜んでくださって。見守ってくださってる先生がいっぱいいるんだなと思ってます。

中條先生もそうですね。私は美術部だったのですが、文章書くのも好きだから演劇部に所属してる子からよかったら脚本書きませんかって言われて。でも、脚本は文化祭とかで書いたことがあったけれどその時は結局自分では満足いなくて「これじゃない！」となっていた記憶がありました。書いてみたけれどすごいまだ拙かった。その時に中條先生とか川辺先生たちが脚本にすごく色々アドバイスをくださってね、すごい楽しかったし嬉しかったし……っていうのですごくお世話になりました。

*

中高生時代

—美術部とかで作品作ったりしたんですか。
今一階に壁一面ぐらいの大きい絵があると思うんですが。同級生の

子とか後輩の子とかみんなで描いた壁画で、半分を立守が描いて半分がトルコの学校の子が描いた作品です。毎年どこかの国と一緒に描くっていう取り組みで、何回か描いていてルーマニアとかインドもあったかな。国際交流壁画を描くにあたっては、英語でお手紙書きあったり、こっちのお土産かを向こうに送ったりして交流を進めた後こっちでみんなペンキとか絵の具とかで絵描いて半分まで仕上げたのを海外に送って、その海外の人たちが続きを描くという感じでした。それがきっかけで海外の人と芸術で繋がるのって楽しいなと思うようになりました。やりがいもあるしみんな得手分けしてここにこういうデザインを入れたみたいなのを考えて、海外とZoomとかで繋がって、国とか関係なく国境を飛び越えて一緒にのシートに描いて。向こうの学校の子が私たちの描いた絵の部分を持って、今から描きますというような写真をもらった時はすごい嬉しくてみんなで楽しく描いて、いい思い出です。

—高校生活で一番の思い出ってなんですか？

一番は決められないです。例えば体育祭は、コロナ禍であった年となかった年があつてなかった年は球技大会だったんですよ。高三の時、男女混合でドッジボールしたんですけど、その時にみんなが本気出しすぎてちよつと怖かったという。で最後に一人の子のiPadでみんなで撮ろうって言って撮った写真もまだ残ってると思う。

—めっちゃそれ大切ですよ。

そうそう、その感じで文化祭もそうでした。高三の文化祭で、特に印象に残っているのが、本番二日前に急遽大道具を追加することになって、みんなに呼びかけたら、クラスの半分の子達が、遠くから来ていた子とかも、段ボールを持ってきてくれて……感動しました。みんな一生懸命取り組んで、最優秀賞ももらえて、最高でした。あとはほんとに部

活の絵描いた思い出とか。滋賀県大会に向けてみんな一人一個ずつ作品作るっていうのがあった。一個学校の方に置いたままにしてるけどペン画の作品を書きました。夏にかけて書いたっていう思い出も残っています。一つ一つが思い出、全部大切。

でも印象深かったのは高三。高三の記憶が一番あるかな。高一、高二がコロナで潰れてしまったからかもしれないけれど、比べたら、一番クラスの中で開放的でした。高一の時は高一の時、国際交流イベントみたいなのに参加しませんか、といったことがまだ盛んで……コロナが始まってなくて。だから、イオン一%クラブのイベントで、ベトナムに二週間ぐらい行って色んな国の人たちと会話して仲良くなれたのもすごくいい思い出です。あと、また高三の話になるけれど、探究もあったな。そのフィールドワークで私がやってたのが、外来魚を駆除するためにブラックバスとかでかまぼこを作って……。

―それ聞いたことがあります。

え、ほんとに？ 恥ずかしい。食べるのが好きでね、かまぼこにしました。白身魚として、ブラックバスが海外とかでは盛んに食べられてるから、日本ならかまぼこにできるんじゃないかみたいな気持ちで、すりつぶしたら減るやんみたいな感じで、試作品を作るために沖島に向いて魚を貰ってきたりしましたね。確か、APの時に来てくださった先生に「それってやつば臭みとか気にならない？」って言われて。それで次週のAPの前日に試作品を作ってね、冷やした状態で持ってきて。

「試作品です食べてください。」って渡したら驚かれたのはちょっと嬉しかった。やけど、そのことを田辺先生にもずっと言われるし。だから聞いたことあるのかな。

あと、びっくりしたのが坂先生が前に高大連携で教授向けに高校生

がこんなことをしていますみたいな紹介をしたらしくて、それで文学部の先生たちがそれを聞かれていたらしくて授業の後、質問しに行った時に、「君さ。かまぼこ作った子だよね？」ってかまぼこの人で認知されて、びっくりしたことがあります。

―かまぼこ作るっていう発想がすごいです。

探究をやるにあたって取り組みを実現させないみたいなことを先生がおっしゃっていて。実現させるってどういうことかって考えた時に、食べ物とか面白そうだなって。私が元々、高二の時にやってたのが、大学四年生の今の卒業研究の方に近いんですが、古い建築を守っていくとか、まちづくりとかに関わる探究活動で。そういったものを経て滋賀県を元気にするっていう意味でも、「食」っていいのかなと思うてました。

あとは、中学校の一年生の琵琶湖学習の時に取り組んだのが、ビワオウズムシっていうプラナリアの仲間を切ったら増えるのかみたいな、それを研究してたんですが、最終的に天然記念物だから切れないみたいなことがわかって。琵琶湖に触れるっていう活動もあったから琵琶湖とか滋賀県が好きだったという気持ちはずっとあって、それで外来魚に対しても楽しくアプローチできたらいんじゃないかっていう意識があった。父母の実家が山口でかまぼこが有名で身近な食べ物で、かまぼこだったら美味しくみんな食べれるんじゃないかなと思って。インタビューしたりとかしながらかまぼこを作って形になったっていう感じです。

そういう活動を続けたいなと思って、大学一年生の時とかに滋賀県のMLGs（マザーレイクゴールズ）っていう、滋賀県版のSDGsを滋賀県が広めるための漫画みたいなものを描くっていう機会をいた

いて、漫画を連載させていただいたりして経験として楽しかったです。

あと滋賀ブラスワン（滋賀県の広報誌）で、ヴォーリズ建築とか自分が興味があることについて記事書かせてもらったりもして楽しかったです。高校の時の経験が大学入ってからも続いてて、やっててよかったな。立守よかったなって。こうした活動のきっかけも滋賀県の仕事に関わっていたA Pの先生からもらったりとか色々お世話になりました。

コロナに奪われたからこそ今の今と成長

―大変なことはありませんか？

大変だったのは色々あったけど、一番印象的だったのは、探究活動と修学旅行、文化祭、定期試験と進学のための諸々が重なった時かな。高三の時に修学旅行がコロナ禍やったから。で、国内になって国際交流について学びに行くとか会社見に行くとか色んなものがあつて。で、私は「なかなか行けへんやろな」と思っていた徳島の神山っていう山に囲まれた滝とかがあるような場所に行つて。そこでは、古い建物を活用して企業を呼び込んで、山間にある自然豊かな環境を生かしてビジネス拠点を作ってみようみたいな取り組みをしていて、それを見に行く研修でした。まちづくりの話聞いていて、やっぱり面白いなと思つて。

その時に探究のレポートの修正と定期試験も文化祭も重なつて。みんな大変だったけど、やりがいがありました。卒業式終わつてからも、選ばれた何人かが大学の朱雀キャンパスに行つて、大学の先生たちに対して発表するっていうのがありました。バタバタしてたからこそ楽しかったなっていう。

*

高一の一月ぐらいからコロナ禍になったから、もう高二の時代はほぼ

オンラインみたいな感じで。Zoomで授業やつて、その休み時間も暇だったしその時に、色々本読んだりとかiPadで絵描いたり。最終的にスキルを伸ばす期間として役に立ってた気がします。その時に色々挑戦できたのもよかったな。

その時に遊んでたA d o b eのアプリを大学に入ってから也使つて企業のキャラクターを作りましたみたいなイベントに参加して。立守時代の美術部と演劇部で一緒だった後輩と一緒に日立造船っていう会社がかナデビアつて名前に変わったのを機に、キャラクターを作つて社内教育用のビデオを作るといふイベントでした。企業の人に選ばれたら採用されるといふもので、二人とも文学部だけど、二人ともA d o b eを立守時代に使つたことがあつたからそれで一位取れたりとか。それもきっかけで今A d o b eのスチューデントアンバサダーっていう活動もやつていて。

―すごい。今楽しいことずつと話したんですけど、逆に高校生活で挫折とか後悔したことありますか？

結構大きい壁になったのはやっぱりコロナ禍やったから修学旅行なかったのは悔しくて。だいぶしんどいよなつてみんな話してました。

―ちよつと複雑ですよ。

そうそう、留学で中学はニュージーランド行つて学校でクラスによつて、どこの学校に派遣されるかが違いました。で、住宅街にステイした子たちもいたんだけど私たちがステイしてたのが、本当に牧草地帯みたいところで、私がステイしていた家の前の道路は舗装されてなくて時速一〇〇キロ以上出していって感じで。周りも隣の家までの距離がすぐくてどこの家も牧場をやつてるところで。大草原の小さなところにステイしてて、でも逆にのんびりほのぼのしていました。

―あ、確かに日本では味わえなさそう。

そうそう、私がステイしたお家も牧場で、窓開けたら子牛と鶏がいるっていう生活をしていました。向こうで仲良くなった子がいて、帰りのバスでその子の家に着いた時、「あれが私の馬よ。」って馬を指して教えてくれて。そのまま白馬に乗って帰って行ってびっくりしたりとか。いい意味でカルチャーショック。で、高校は中入の時から「アメリカ行けるんや」と思ってたから行けなくなっただけでショックでした。コロナ禍でどこにも行けへんし鬱屈とした気持ちはちよつとあつたけど、自分と向き合いながら将来に向けてじっくり向き合える期間でもあつたのかなと思います。今振り返ると間にみんなブランクがあつたから、「今できることってなんだろう」とか思えてよかったなって。

*

挑む、やりたいことが増える理由は立守にある

―すごいです。やってる人が多い。

一つのことには集中できないんですよ。立守に入ったらそうなくていくんじやないですかね。友達や後輩繋がりでいろんなことやってる子たちと繋がれたからいろんな範囲に興味持った感じはあつたのかな。

―立守で得たことありますか？

経験として今も活かせることは、挑戦。高校時代の私たちの学年のテーマが、「挑む」だったから、挑める機会を先生たちからももらつたし、自分たちで挑むっていう機会もたくさんあつたから。本当にありがとうって思っています。立守の先生たちとか、友達みんなに感謝。本当にそんな感じです。

―最後に、高校生活でやっとなげばよかった、やっけてよかったことかありますか？

やっけてよかったのは……先生や友達が沢山の「挑める機会」をく

れるから、恐れずに取り組んでいくのが一番大事やと思うし、やっけてよかったなって実際に思っています。それで色んな機会をもらえて、今の自分があるかなっていう風にも思いますね。あとは、コロナ禍があつたからできないこととかもあつたし、やっとなげばよかったなっていうのは、国際交流系のイベントがコロナ禍で少なくなったのもあつたから、もうちよつとそういうの参加したかったなって。でも、国際交流イベントに参加したのも「挑む」でしただけでそれで繋がった友達ともまだ繋がってます。それを楽しんでいるって思えるっていうのが一番よかったから、やっぱり挑んでよかったなっていうのもあります。挑めばよかったことっていうのが……自分からいろんなチャンスに挑むってことはあつたけど、自分からチャンスを作り出すってことかなと思います。例えば私の場合やったら、絵描いたり文章書いたりとかするのが好きなのでもっと自分から発信できたらよかったなと。

―高校生活、一言で表したら、挑むって感じですよ。

はい。チャレンジを恐れないというか、で、いい先生たちにも出会って、いい友達にも出会って、いい機会にも恵まれて。本当に立守入ってよかったなって。今回も現役で青春を謳歌されている前出さんとお会いできてよかったなと思つて。逆にエネルギーもらった気がします。ありがとうございます。

―こちらこそありがとうございました。

【感想】

どんな物事にも恐れずとにかく挑戦することを大切にして高校生
活を送っていらつしゃって心に響いた。私はいつも勇気が出ないまま時
間が過ぎていつて後から後悔をしたことが何回もあった。お話を聞いて
一歩踏み出すだけで自分から見える世界が大きく開いて明るくなること
を教えていただいた。またこれから自分の中で殻を破れずに迷うことが
出てくると思うが、挑む気持ちを持って残りの高校生活を歩んでいき
たいと思う。



右..聞き手 前出 彩寧
左..語り手 阿部 瑞希さん